

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號四第

卷二十三第

行發日一月四年六和昭

論叢

地方人税の課税方法 法學博士 神戸 正雄
 デイルタイ哲學と經濟哲學 經濟學博士 石川 興二
 數學的經濟學の論理的構造の批判 文學博士 米田庄太郎
 利子の形成について 文學博士 高田 保馬

說苑

米の生産と消費の分離 經濟學士 谷口 吉彦
 農業恐慌 經濟學士 八木芳之助
 獨逸中工業金融機關とIndustrieschaft 經濟學士 楠見 一正

雜錄

測るべき大量 經濟學士 蜷川 虎三
 生計費指數に就て 經濟學士 益田 熊雄
 百姓一揆論に土屋喬雄氏に答ふ 經濟學博士 黒 正 巖

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

(禁 轉 載)

雜 録

測るべき大量

蜷 川 虎 三

は し が き

昨年の本誌十二月號に於いて、私は「大量」に就いて
卑見を述べたが、「大量」は統計學の出發點に於ける基
本概念で、かの小論がよく問題を全面的に捉へ而も分
析を盡してゐるとは、私自身も決して考へては居ない
私にとつては、僅に問題を一定の方向と仕方に於いて
捉へたに過ぎず、既に指摘した如く、幾多の問題が殘
されて居り展開研究を要す可き部分が少なくない。本
稿は、其の補遺の一つとして、前文に於いて極めて簡
單に取扱つた一個の問題を考察の對象とするものであ
る。

讀者の便宜のため卑見を要約して置く。——「大量」

とは社會的集團 (soziale Massen) の謂である。集團は
個體の一團であるが、社會的集團と謂ふ限り、それは
限定されたる意味の集團として、他と區別さるべき特
質を有つてゐる。その特質は、集團としての存在が社
會的に規定されてゐることに在る。而して此の社會性
こそ、「大量」に就いて見失ふべからざる標識であると
云ふのが私の主張の要旨である。

一 二種の大量

大量は種々なる觀點より分類區別され得ることは、
從來の統計學教科書の示す所より明らかである。併し
種々なる觀點と云つても、決して考へらるべき汎ゆる
觀點が大量の區別の基準となり得るものではなく、そ
れが意味を有ち得るためには一定の限界がある。私は
此の基準の在り得べき範圍を「大量の四要素」に置く。
大量の四要素とは、單位、標識、時及び場所である。
併し、大量の根本的決定因子は、之を組成する單位で
あつて、大量の本質的なる區別は單位の性質に基づくも

* 拙稿、經濟統計論の性質に關する一考察、本誌二十五の四

のでなければならぬ。一般に特定の立場とか觀點とか謂ふものは、單に Denkbar の故に隨意に採り得るものではなく、採りまた採らねばならぬ所のものを一定の關係から規定されるのである。これを意識すると否とは、社會科學の研究に於いて、其の結果に重要な差別を生ずるが、いまそれには言及しない。

大量の區別を單位の性質に於いてなす時、其の性質は、社會的性質であつて自然的性質でないことは極めて明瞭の如く思はれるが、實際に於いて、統計學者に依り必ずしも強く意識されてゐるとは云ひ難いのである。其の著しき例は、私が前論文に於いて指摘したフラスケンバーの場合である。¹⁾ ゆゑに私は、次の項に於いて其の論據を説明する者であるが、併し現代の統計學を基礎つけたマイヤーに於いては、寧ろ其後の統計學者の曖昧なるにも拘らず、此の點が明確に意識され彼は、社會關係に立つ人間に關係して大量の種別の基準を求めた。²⁾ 此の點に就いては大に敬服すべきでありまた専ら人口統計中心の統計學の行はれた時代に、經

測るべき大量

濟統計論にまで統計學の展開を企圖したマイヤーに於いて、斯かる大量の種別を強調する必要のあつたことも察せられるが、實は餘りに自明のことである。寧ろ問題は、如何なる社會關係に在るかで、此の社會關係の異なる所より、大量を分つべきで、單に人間に關係して分つべきではない。蓋し、社會的現象及び事實を問題とする限り、人間に關係してゐることは餘りにわかり過ぎてゐることだからである。而してまた我々がかゝる立場に於いて大量を區別してこそ、統計方法に於ける特殊性も認識せられ、統計學が諸部門を以て展開されるべき方向も定められるからである。マイヤーに於いては、從つて又、たゞ之に追隨する多くの學者に於いても、遺憾ながら、此の點に於いて、理論の發展に一貫したものが無い。要するに、大量の種別を問題にするのは、統計方法の研究のためであるが、右の如き見地に立つて。從來學者の論ずる所を批判すること重要であり、他の機會に於いて私の試みとする所であるが、こゝには、其一つの場合を見るにとゞめ

第三十二卷

七二九

第四號 一四一

1) 前記論文の引用書參照
2) G. v. Mayr, Statistik und Gesellschaftslehre, I Band. 2te Aufl. Tübingen, 1914, § 4. S. 5. (財部博士社會統計論網 P. 20—「サレト又社會上の大量として顯はるべきものは社會關係を結べる人々の總計に限らず、人々の及社會事變に就きても(假令は犯罪)又行爲の結果として外界に存續すべきに就きても(假令は米麥産額)之を求め得べし」參照)

る。

普通大量として例示されるのは、大量を組成する部分分が、何れも互に區別され、獨立存在として認めらるべきものである。殊に、個々の人間、個々の事件、場合等を以つて組成される大量の如きは多くの場合、その明らかかな例とすることが出来る。具體的に云へば、失業者、ストライキ、破産の如きこれである。大量は集團たる限り、獨立の組成部分即ち單位の存在を前提にしてゐるが、此等の場合に於ける單位の存在は明瞭である。かくの如き大量の大いさは、單位の總和、従つて單位の數で示される。此の意味に於いて、單位を「數ふべき大量」である。所が大量に就いて、其の大いさが量を以つて示されるものが擧げられる。例へば、米穀生産高、鱈の漁獲高、電氣生産量、銑鐵生産高、耕地面積、取引數量或は金額、國富等々の如きである。此等は何れも物理的なる量或は貨幣量を以つて示され大量の大いさが數を以つて示されぬ點に於いて前者とは異なるものである。よつて之を區別するために、單

位を「測るべき大量」と名づける。

併し「測るべき大量」の大いさが一個の量として示されることは、量たる性質上、其の部分の同質性を意味し、部分には獨立なる存在としての個別性はない。例へば、米の一定量、電氣の一定量をとつて見る場合其の部分恰も個々の人間の異なるが如き意味の差別を有つものではない。如何なる部分をとつても米は米であり、電氣は電氣である。フラスケンバーは此の意味に於いて、「測るべき大量」には「數ふべき大量」に於けるが如き意味の「單位」はないと主張する。彼に依れば「測るべき大量」の單位は「測定單位」であると云ふ。併し、大量は社會的集團であり、集團である限り獨立なる個別部分の存在、即ち統計學上謂ふ意味の「單位」の存在を前提するものである。ゆゑに、此の場合「單位」の存在の否定は、とりもなほさず大量の存在の否定である。而も「測定單位」の存在のみを主張することは、大量を單なる「大きな量」、「大きな數」と見ることに他ならない。然りとすれば、所謂大量觀察と土木技手の

道路の測量、自然科学者の測定と何處が違ふのであるか。かゝる主張をなす者は、先づ此の點に就いて充分なる説明を與へなければならぬ。然らずんば、統計學の存在の意義はないからである。

かゝる主張は、併し、社會科學に於ける認識不足に出發した謬見である。蓋し論者は、大量の社會的集團たることを意識せず或は之を忘れ、偶々其の大いさが量を以つて示されることに囚はれて、之を單なる自然物と見るからである。例へば、米穀の生産高は「社會的に生産された米穀」なる大量の大いさを示す一個の表現で、米穀の生産高なるものがそれ自體として大量なのではない。それは生産された米の量である。敢てフラスケンパーばかりではない。多くの統計學教科書は何れも間違つた説明を與へてゐる。また「社會的に生産された米穀」が問題であるから、此の場合、自然科学的なる立場に於いて米を云爲するのでは勿論ない従つて「社會的に生産された米穀」が大量とされる限り、それは社會的なる意義に於いて獨立なる個別部分

測るべき大量

の存在を豫想してゐるものである。即ち自作農、小作農等の生産者により、生産地或は其他に依り、生物學的には同一とされる米が、社會的には異質的なるものとされる。かゝる「單位」は其の屬性として「大いさ」を有つ。例へばA自作農に依り生産された米a石の如し此の單位の有つ量の總和が生産高である。生産高が量であるが故に、「單位」がないと云ふ主張は此の意味に於いて全く成立し得るものではない。この事は他の場合に就いても同様に論ずることが出来るが、一々繰りかへし説明する必要はないであらう。

要するに「測るべき大量」に於いても、それが大量たる限り、「單位」は存在し、其の「單位」は社會性に於いて存在するものであつて、自然的なる物としての性質に於いてではない。之を「數ふべき大量」と區別するのは、「測るべき大量」に於いては、其の單位に大いさの差別を認むるに對し、「數ふべき大量」の單位に就いては、その大いさの差別を認めざることによる。かゝる認識は社會的のもので、單位の自然的性質の必然的結

果でないこと云ふことは特に注意を要する。蓋し、大量は一定の社會的關係により規定されるもので、此の認識の下に於いてのみ、その數量的把握も可能とされるからである。

然らば、我々は大量を統計學上何故に右の如く解し又解さなければならぬのであるか。次に其の論據を説明しなければならぬ。

二 大量規定の立場と方法

統計學で謂ふ所の「Masse」はそれが「Masse」とされる限り、個別部分の存在を豫定した概念であることは自明のことである。然らずんば、單に一個體の大小の差違にとゞまり、一個の量たる以外の何ものでもないこととなるからである。ゆゑに我々の問題は集團を個體より區別することには存しないで、何故に一般的なる Masse より統計學で謂ふ所の、特殊なる Masse を區別し、之を規定しなければならぬか、またこれを區別する基準が何處に在るかと云ふ點になけ

ればならない。既に言葉の上でも「soziale Masse」或は «statistische Massen» と云ふ場合の「社會的」或は「統計的」は單なる無意味の形容詞ではなく、Masse を規定する Merkmal を示すものに他ならない。従つて此の問題に答ふる方法は、統計學に於いて Masse とされるものが、他の masse より區別される Merkmal が統計學に於いて如何に規定され、また規定されねばならぬかを、統計學それ自身の性質より見るより他にはないのである。

既に統計學が明白に Masse を規定して居れば勿論何等問題は無いが、之が明確にされていない以上、統計學の性質を吟味することに依り、統計學が如何なる Masse を豫想してゐるかを明らかにすることが、ここに採用し得る唯一の方法である。斷るまでもなく、統計學の性質を吟味することは、從來の學者により「統計學」と定義された所のものが何んであるかではなく何故にかゝる定義を與へなければならなかつたかの實質的内容の問題である。また此の場合、統計學上 Masse

と云はれるものを分類彙集して、其の性質を分ち、本質を捉へると云ふ方法も一應は考へられる。併し此の方法は決して正しいものではない。何んとなれば、果して正しい意義に於いて、此等が統計學に於いて *Masse* とさるべきものであるかどうかを證明する理論的根據のないこと並に之を分類彙集する基準を與ふべき理論がないからである。かゝる理論は一般に社會科學及び統計學それ自體より之を求むる他はない。此の意味に於いても統計學の史的發展の過程を追跡することは重要である。勿論、此等の問題に就いては詳論を必要とするが、限りある紙數に於いては不可能のことであり、こゝには前項の理論的根據を示し得る範圍内に於いての摘要を示すにとゞめる。

統計學が所謂科學であるか、研究方法論であるかはこゝに論ずる必要が直接にはない。たゞ、統計學が社會科學の領域に屬する學問であることは、否定し得ぬ事實である。このことは言ひ換へれば、その對象も方法も社會科學的のものでなければならぬと云ふことを

測るべき大量

意味する。統計學が一般に社會的理論の認識把握の下に成立すると云ふことは、統計學の汎ゆる問題の研究、考察に於ける根本的なる規定である。

次に統計學は—私は、こゝでは専ら獨逸の統計學を問題にしてゐる—形式的に如何なる定義を與へて居やうとも、現實には所謂「大量觀察」 (*Massenbeobachtungen*) を其の根本的問題にしてゐることも疑ふべからざる事實である。而して之に關しては、理論的及び技術的に種々の問題が掲げられてゐるが、結局、目的とする所は次の三點に歸着する。(1) *Masse* の大きさを定めること、(2) *Masse* の有つ性質—集團性—の方向を確しかめること、(3) 集團性の存在或は發現の強度を求めること、即ち之である。

この方法の科學的意義は、現象或は事實の性質を個體のものとしてではなしに、集團のものとして、而も數量的に認識把握することに在る。此の目的のために統計學は、*Masse* に就いて其の「單位」を規定することにより *Masse* を規定すると共に、「標識」を定めて集

團性を檢し、また「單位」の數或は量を求めることにより、集團の大いさと各個の「標識」の下に現はれる「單位」の數或は量を明らかにする。勿論、このことのみが統計學の問題とは、少なくとも私は考へないが「大量」を問題にする獨逸の統計學は右の二點を特徴とする。ゆゑに此の特質に於いて、一般的なる意味に於ける集團が、所謂統計學に於ける集團として、如何なる限定を受けてゐるかを見れば問題に答へ得ることとなる。

以上の統計學の性質は、次のことを前提にしてゐるのでなければ其の意味をなさない。即ち、(1)統計學で謂ふ所の集團は、一般的意味の集團ではなく特に「社會的な存在」として條件づけられてゐる集團であること、(2)此の社會的存在たる集團が集團として有つ性質即ち集團性は之を構成する個々の因子に異なる形態と程度に於いて發現すること、(3)集團それ自體並に集團性の存在及び發現が數量的に認識し得るものなること等である。

私の先の論文「大量に就いて」は右の根據に於いて大量を説明しまたフラスケンバーの見解を批判したもので、再びこゝに一々之を説明する必要はないと思ふが殊に注意すべきことは、大量が社會的に規定せられた集團であり、之に就いて我々の問題とするのは、かゝる個人の意志とは獨立に存在する集團の社會的性質であり、自然により規定せられて存在する集團の自然的性質を見るのではなく、また我々が特定の目的より、意識的に構成した集團でもないことである。マイヤーが特に“soziale Massen”と云つてゐることは、之を正しく解し、彼により充分に意識せられざりし點、彼によつてはなほ展開せざれざりし方面を發展せしむることこそ、現在の統計學の問題でなければならぬ。

次に、統計學に於いては、社會的集團に於ける性質は之を構成してゐる個々の因子に、何等かの形と程度に於いて存在し或は發現することを豫想してゐるのである。然らずんば、「單位」や「標識」を規定することは意味をなさぬ。而して何を「單位」とするかは、何を

「大量」とするかの社會的認識の問題である。統計方法殊に大量觀察の理論は之を社會的理論の獲得の目的に於いて數量的に把握する方法の研究を目的とする。之を理論的に規定するものは社會認識の方法理論であり之を實際的に限定するものは、大量觀察の技術である。

三 測るべき大量に於ける問題

以上の意味に於いて、測るべき大量が大量たる限り「單位」は存在すべきであり、また存在しなければならぬ。而もその單位の規定は、社會的性質に於いてなされるものでなければならぬことは明瞭であらう。このことは概念的な問題で、どうでもよいこと、考へられるかも知れないが、實際は重要な問題である。

蓋し、大量の大きさが單に量として示されるが故に其部分は同質性であるとするのは、單に統計方法に於ける「單位」の否定にとゞまらずかゝる大量の否定、換言すれば、それが社會的集團としての社會性の否定

を意味するからである。殊に「測るべき大量」に關する問題は經濟統計論に多いのであるが、右の否定は、かゝる大量を單なる自然物の量として見て、その社會に於ける生産關係に於いて存在することを無視することになり、其の認識を不充分或は不可能のものたらしむる結果となる。このことは、統計學の社會科學の研究方法の學問としての性質を失はしむること、なるであらう。従つてまたかゝる認識不足に出發した大量觀察に基づく統計は、現實の社會に就いて無意味となるが、他の一面に於いては、數字の正確性の假面に於いて、現實を歪めて示して居るにも拘らず正しきものとしての資格を要求し或は之を強ひるであらう。之れ私の特に統計の信頼性の批判を強調する所以である。統計方法の問題として「大量」を如何に規定するかのは、一應概念の遊戲であるかに見ゆる。併し我々の問題は單なる概念の規定に逍遙するのではなく、現實の問題の正しき解決のための概念の規定であり、其の必然の要請である。

實際問題としては、かゝる「測るべき大量」を如何にして捉へるか、また單にその大いさのみが問題とされる場合には、如何なる大量の標識として之を捉ふべきかの問題を生ずる。此等は個々の大量に就いて別個に論んぜらるべきであり、殊に「數ふべき大量」との關係に於いて幾多の問題を有つが、本文に於いては、一般論をなすにとどめ、他の機會に於いて特殊部門の統計を論ずる際に、改めて此の問題に及びたいと思ふ。

(一九三一・三・九)